

# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



### 合田 直弘

1月18日に惜しくもこの世を去った、種牡馬エンパイアメーカー（父アンブライドルド）が今月のこのコラムの主役である。

カリッド・アブドゥラ殿下のジャドモントによる北米における自家生産馬エンパイアメーカーは、ハリウッドパークのG1ゲイムリーH（芝9F）、ニューマーケットのG3クライテリオンS（芝7F）など、欧米で芝の重賞を4勝したトウソードの6番仔だ。5歳年上の半兄に、アーリントンパークのG1アーリントンミリオン（芝10F）、サンダウンのG3ブリガディアジェラードS（芝9F209㌢）と、母同様に欧米両大陸で芝の重賞制覇を果たしたチエターハウスがいる。

ボビー・フランケル厩舎から2歳10月にデビュー。3歳3月にG1フロリダダービー（d9F）を9<sup>3/4</sup>馬身差で圧勝しG1で重賞初制覇を果たすと、続くG1ウツドメモリアルS（d9F）も連勝。だが、1番人気に推されたG1ケンタッキーダービー（d10F）はファニーサイドの2着に敗れ、馬主にとっても調教師にとっても悲願だったダービー制覇には手が届かなかった。

次走のG1ベルモントS（d12F）では、3冠がかかっていたファニーサイドらを破って快勝したエンパイアメーカーは、続くG2ジムダンディS（d9F）で2着に敗れ

た後、蹄を傷めて現役を引退。04年に10万ドルという種付け料が設定されて、レキシントンのジャドモントファームで種牡馬入りしている。

伯楽フランケルをして、「自らが手掛けた最強馬と言わしめたエンパイアメーカーは、初年度産駒から、G1アルシバイアデスS（AW8.5F）など2つのG1を制したカントリースター、09年のG1スピンスターS（AW9F）勝ち馬ムシユカ、10年のG1スピンスターS（AW9F）勝ち馬アコマ、G1パーソナルエンセンス（d10F）勝ち馬アイコンプロジェクトらを輩出。そして2年目の産駒から、現役時代はG1サインタアニタダービー（AW9F）など2つのG1を制し、後に種牡馬として3冠馬アメリカンファイローを送り出すパイオニアオウザナイルが登場。種牡馬としても上々の滑り出しを見せた。

その一方で、代表産駒の成績にも表れているように、主な活躍の舞台はオールウエザーで、そのあたりがジャドモントにとっては思惑外れだったのだろう。8シーズンの供用を前にした10年11月に、同馬は日本に売却され、その後の5シーズンはJBA静内で供用されることになった。手放した途端に産駒が走り始めるというのは古今東西よくある話で、2度にわたって制したG1BCレディースクラシック（d9F）など、11年から13年にかけて

6つのG1を制し、3年連続で牝馬チャンピオンのタイトルを手にしたロイヤルデルタが、父のいなくなった北米に出現。同馬以外にも、ラストフルメジャー、グレースホール、ボデイマイスター、インランジェリー、エモリエントといったG1勝ち馬が登場し、北米の生産者をおおいに悔しがらせることになった。

こうした声を受けて動いたのがゲインズウェイファームで、買戻されたエンパイアメーカーは16年春にケンタッキーに復帰。帰国後の初年度産駒が昨年2歳を迎え、その中から、G1アメリカンファイロース（d8.5F）勝ち馬エイトリングスが（登場している）。

日本では、3世代目の産駒の1頭となるフエブラリストがG2中山記念（芝1800m）など2重賞を、5世代目の産駒の1頭となるイジゲンがG3武蔵野S（d1600m）を制覇。そして、日本供用中の産駒から、G3愛知杯（芝2000m）勝ち馬エテルナミノル、G1秋華賞（芝2000m）3着馬カイザールが登場したが、米国で残した実績には遠く及んでいない。

エンパイアメーカーは20年も供用を予定し、8万5千ドルという種付け料が発表されていたが、免疫力が低下する病に斃れて急逝。享年20歳だった。